２０１３年5月２０日（月）　東京新聞 掲載

学び自分取り戻す

挑戦者へのエール

ユニバーサル服飾高等学院

カタカタと動いていたミシンが止まり、完成したばかりのエプロンを女子生徒（十七）が身に着けた。

「わあ、かわいい」

「おめでとう」

教室に拍手が沸き起こる。自分でデザインしたエプロンの端をギュッと握ったその顔は恥ずかしそうだが、少し誇らしげだ。

川崎市多摩区登戸で四月、「ユニバーサル服飾高等学院」が開校した。通信制高校「明蓬館高校」（本校・福岡県川崎町）と連携し、ファッションを学びながら高校卒業資格を取得できる。現在、在籍する生徒は二人。いずれも学校が合わず、中学時代から不登校になっていた。

「高校卒業資格を取得できる学校をつくるのが長年の夢だった」と語るのは、校長の栗田佐穂子さん（六七）。洋裁学校「登戸ドレスメーカー学院」（多摩区）の副学院長として四十年以上、生徒と向き合ってきた。学校生活で自信を失い、おびえた様子で入学してきた生徒たちが、好きなファッションを学びながら、一、二年かけて元気になっていく姿を見続けている。

「大人数が集まる学校では、こぼれ落ちた生徒を救えない。そういう子を救える教師も必要だと思った」。そして、大学進学でも就職でも、その子なりの考えで自由に選べる道を開くために、高校卒業資格が必要だとも思っていたという。

カリキュラムはユニークだ。生徒は、インターネットを使った通信学習で高卒資格に必要な単位を取得する。定期試験はなく、ファッションショーやイベントの感想文が「国語」、製品を作るための経費などの計算が「数学」の単位になる。年に一度、明蓬館高校へ四泊五日でスクーリングに行く。

学校では、ドレスメーカー学院の自由科、基礎科と一緒に材料学や立体裁断、ピンワークなどを学ぶ。市が優れた技術者として認定する「かわさきマイスター」でもある栗田さんは、「卒業後、どんな仕事でもできるだけの技術は身に付けられる」と胸を張る。

職員六人全員が中高の教員免許を持っており、臨床心理カウンセラーもいる。隅々まで目が行き届くよう少人数制で、希望者は放課後、栗田さんが代表を務めるボランティアグループ「糸の詩」に参加もできる。

「作業が始まると、しゃべらなくても当たり前なので楽」とは冒頭の女子生徒。中学では「友達と話さなければ」と頑張り過ぎて教室に入れなくなってしまった。「最近、母親が再婚したので、いつかウエディングドレスを作ってあげたい」が今の夢だ。

もう一人の女子生徒（十七）は、ずっと進路が決まらなかったが、服飾関係の仕事をしている親を見て興味を持った。「長いこと夢とか目標とかあやふやだったから、よく分からない」ながらも、「やっているうちに何か見つかったらいいな」と前は向いている。

（平木友見子）

上 ユニバーサル服飾高等学院の栗田佐穂子校長
下 熱心にミシンを動かし、自分のデザインしたエプロンを縫う生徒ら＝いずれも多摩区で

ユニバーサル服飾高等学院　基礎から学ぶ週５日のファッション造形科と、週２日のファッション手芸科があり、教育期間は原則、入学から３年間。選考方法は面接試験。栗田さんが提唱する高齢者や障害者も簡単に着脱できる「ユニバーサルデザイン」も学べる。問い合わせは、同学院＝電（900）8844。